全生徒の自己ベスト 更新を目指して

来年度から小規模特認校となり、令和5年度からは近隣の小学校とともに義務教育学校へと移行する箒根中。失敗を恐れず、日々挑戦する生徒を全教職員がサポートする。「全全全で自己ベスト」をスローガンに掲げ、「先生たちへの挑戦」など独自の取り組みを展開している――

笑顔あふれる箒根中の教職員のみなさん。
（中段右から2番目が田崎校長）

生徒と先生が真剣勝負

給食の時間。音楽が突然鳴り止み、アナウンスが響き渡る。「本日の挑戦のお知らせです。一つ目は卓球団体戦…」。放送部員の案内はアナウンサーに引けをとらないほど流暢で、自然と気持ちがかき立てられる。

若手の先生の提案で始まった「先生たちへの挑戦」。生徒が自らの得意分野で挑戦状を送り、昼休みに先生と真剣に競い合う。「この取り組みを始めてから、校内でのコミュニケーションが増えました」。田崎校長はそう効果を教えてくれた。

これまで繰り広げられた勝負は100m走や将棋、暗算に卓球など多岐に渡り、戦績は9勝6敗で先生に軍配が上がっている。生徒からの挑戦に対し、先生も一切手を抜かずに全力で勝負。対決に参加しない生徒も駆け付け、勝負の行方を見守る。「勝っても負けても恨みっこなし。試合が終わればノーサイド」。〝先生〟と〝生徒〟という立場を越えた交流が壁を取り払い、悩みも相談しやすくなる。「目標は、いじめや不登校のない学校づくり。人間関係がこじれても、必ず最終的に解決することが重要」と〝ゴールを迎える生徒指導〟の意義を田崎校長は熱く語ってくれた。

1記念すべき1回目の対決は小雨が降る中の100m走。ここから先生と生徒の真剣勝負が始まった　**2**多くの生徒が見守る中での暗算対決。結果は生徒に軍配が上がった　**3**高いレベルで接戦が繰り広げられた卓球対決。応援に駆け付けた生徒から声援が飛ぶ　**4**職員室前の廊下に張り出された挑戦結果。過去の対決が写真付きで紹介されている　**5**アナウンスで盛り上げる放送部員。メモは名前と対決内容が書かれているだけで、あとは即興で言葉を操る

全全全で自己ベスト

箒根中に通う生徒は92人。一人一人を大切にし、個性を伸ばす教育が進められている。田崎校長に教育の理念を聞くと、間髪入れず「全全全で自己ベスト」との答え。意味を尋ねると「教職員全員で全生徒を全力で育み、自己ベストを達成させる」と話し、「人は誰しも得意不得意があるので、他人と比べてはダメ。自分の目標を掲げ、小さな一歩の積み重ねが大切」と思いを明かした。「まずは自分を知ること。そして、目標に向けてベストを尽くす」。箒根中では生徒の主体性を大切にしながら、全教職員が全生徒を全力でサポートしている。

令和5年度からは関谷小・大貫小・横林小・箒根中が一つになり、新しい義務教育学校としてスタートする予定。移行をスムーズに進めるため、昼休みに合唱部が小学校で歌を披露したり、共同で芸術鑑賞をしたりと交流を深めている。また、高林中の生徒会とも交流し、人間関係が固定されがちな小規模校の弱みを互いに補っているのだという。

他に箒根中の強みを尋ねると「なんといっても自校給食。熱々のスープは、少し冷まさないと飲めませんよ」と笑顔で話し、スープ入り焼きそばやとて焼きなど塩原ならではの給食を提供していることを教えてくれた。現在も新メニューの開発に打ち込んでおり、次のアイデアを尋ねると「それだけは教えられません。乞うご期待ということで」と語る田崎校長の表情は楽しげで、日々生徒を楽しませようと画策する愛情がにじみ出ていた。

試合が終わればノーサイド。直前まで激しい勝負を繰り広げていた相手でも、試合が終わればこの笑顔。

interview

先生たちへの挑戦の感想と箒根中の学校生活について話を聞きました――

岸井 紅男（べにお） さん

校長先生と将棋で対決して、勝つことができました。これまで対戦してきた相手の中で一番強かったです。勝った時の達成感は今でも忘れられません。

吉澤 希来（きら） さん

バレーボール対決では、かなり接戦だったのですが、力及ばず負けてしまいました。学校の魅力は、少人数だからこそ活躍の機会が多いところだと思います。

伊藤 ひでき さん

バレーボールとバドミントンで対決しましたが、あえなく完敗。次こそは勝ちたいです。この学校は生徒もみんな明るくて、先生にも気軽に相談できるので、学校は大好きです。